

日蓮大聖人御書全集

うえのどののごけあまごへんじ

上野殿後家尼御返事

新版
1832
ゝ
1835

うえのどののこけあまごへんじ

上野殿後家尼御返事

ぶんえい

ねん

がつ

にち

さい

うえののあま

文永 2 年 ('65)

7 月 11 日

44 歳

上野尼

ごくよう

もの

しゅじゅた

お

御供養の物、種々給び畢わんぬ。

うえのどのしきよ

のち

音

信

めいど

そうろう

そもそも、上野殿死去の後はおとずれ冥途より 候やら

聞

覚

そうろう

ん、きかまほしくおぼえ 候。

覚

ゆめ

ただし、あるべしとおぼえず。もし夢にあらずんば、

姿

見

幻

見

すがたをみること、よもあらじ。まぼろしにあらずんば、み

見

たも

そうら

定

りようぜんじようど

娑

婆

みえ給うこと、いかが候わん。さだめて霊山浄土にてさば

昼

夜

聞

ごらん

そうろう

のことをばちゅうやにきき御覧じ 候らん。

さいしとう にくげん

妻子等は肉眼なれば、みさせきかせ給うことなし。つい

いっしょ 思

には一所とおぼしめせ。

しょうじょうせぜ

あいだ

契

おとこ

たいかい

砂

数

生々世々の間、ちぎりし夫は大海のいさごのかずよ

多

そうら

こんど

契

りもおおくこそおわしまし候いけん。今度のちぎりこそ

真

夫

故

夫

勸

まことのちぎりのおとこよ。そのゆえは、おとこのすすめ

ほけきよう

ぎようじや

たま

ほとけ

拝

たも

によりて法華經の行者とならせ給えば、仏とおがませ給

うべし。

生

とき

しょう

ほとけ

いま

し

ほとけ

しょうじ

いきておわしき時は生の仏、今は死の仏、生死ともに

ほとけ

そくしんじようぶつ

もう

だいじ

ほうもん

ほけきよう

仏なり。即身成仏と申す大事の法門これなり。法華經の

だいし い

よ たも

すなわ ぶっしん たも

第四に云わく「もし能く持つことあらば、即ち仏身を持つ」

うんぬん

云々。

そ

じょうど

じごく

ほか

そうら

夫れ、浄土というも、地獄というも、外には候わず。た

われ

胸

あいだ

覚

ほとけ

だ我らがむねの間にあり。これをさとるを仏という。こ

迷

ほんぷ

い

覚

ほけきよう

れにまようを凡夫と云う。これをさとるは法華経なり。も

ほけきよう

持

者

じごくそく

ししからば、法華経をたもちたてまつるものは、地獄即

じやつこう

覚

そうろう

むりようおくさい

ごんきよう

寂光とさとり候ぞ。たとい無量億歳のあいだ権教を

しゆぎよう

ほけきよう

離

じごく

修行すとも、法華経をはなるるならば、ただいつも地獄な

にちれん

もう

しゃかぶつ

たほうぶつ

るべし。このこと、日蓮が申すにはあらず、釈迦仏・多宝仏・

じつぽうふんじん　しよぶつ　さだ　置　たま
十方分身の諸仏の定めおき給いしなり。

されば、権教を修行する人は、火にやくるものまた火の

なか　入　みず　沈　者　淵　底　い
中へいり、水にしずむものなおふちのそこへ入るがごとし。

ほけきよう　持　ひと　ひ　みず　なか　至
法華経をたもたざる人は、火と水との中にいたるがごとし。

ほけきよう　ひぼう　あくちしき　ほうねん　こうぼうとう　持　あみだきよう
法華経誹謗の悪知識たる法然・弘法等をたのみ、阿弥陀経・

だいにちきようとう　しん　たも　ひ　ひ　なか　みず　みず
大日経等を信じ給うは、なお、火より火の中、水より水の

底　い
そこへ入るがごとし。いかでか苦患をまぬかるべきや。等

かつ　こくじよう　むけんじごく　かきよう　ぐれん　だいぐれん　こおり　そこ　い
活・黒縄・無間地獄の火坑、紅蓮・大紅蓮の氷の底に入り

沈　たま　うたが　ほけきよう　だいに　い
しずみ給わんこと疑いなかるべし。法華経の第二に云わく

ひと みようじゅう

あびごく い

てんでん

「その人は命終して、阿鼻獄に入らん。かくのごとく展転

むしゅこう いた

うんぬん

して、無数劫に至らん」云々。

こしよりよう

く

免

たま

ほけきよう

ぎようじゃ

故聖 霊はこの苦をまぬかれ給い、すでに法華經の行者

にちれん だんな

きよう

い

たいか

い

たる日蓮が檀那なり。經に云わく「たとい大火に入るとも、

ひ や

あた

たいすい

ただよ

火も焼くこと能わじ。もし大水の漂わすところとならん、

みようごう とな

すなわ

あさ

ところ

え

い

ひ

その名号を称えば、即ち浅き処を得ん」。また云わく「火

や

あた

みず

ただよ

あた

うんぬん

頼

も焼くこと能わず、水も漂わすこと能わず」云々。あらたの

もしや、たのもしや。

せん

じごく

ほか

求

ごくそつ

てつじよう

あぼうらせつ

詮ずるところ、地獄を外にもとめ、獄卒の鉄杖、阿防羅刹

呵 責

声 べつ

ほうもん

だいじ

のかしやくのこえ、別にこれなし。この法門ゆゆしき大事な

あま 対

教

れい

れども、尼にたいしまいらせておしえまいらせん。例せば、

りゆうによ

対

もんじゅぼさつ

そくしんじようぶつ

ひほう

説

たま

竜女にたいして文殊菩薩は即身成仏の秘法をとき給いし

がごとし。

聞

たま

のち

しんじん

致

たま

これをきかせ給いて後は、いよいよ信心をいたさせ給え。

ほけきよう

ほうもん

聞

しんじん

励

法華經の法門をきくにつけてなおなお信心をはげむを、

真

どうしんじや

もう

てんだい

じゅうらんにしよう

あい

まことの道心者とは申すなり。天台云わく「従藍而青（藍

あお

うんぬん

しゃく

こころ

藍

は

よりして、しかも青し」云々。この釈の心は、あいは葉

染

青

ほけきよう

藍

のときよりも、なおそむればいよいよあおし。法華經はあい

のごとし、修行のふかきはいよいよあおきがごとし。

じごく

にじ

土

掘

訓

ひと

し

とき

地獄という二字をば、つちをほるとよめり。人の死する時、

土 掘

者 そうろう

じごく

い

しびと

焼

つちをほらぬもの候べきか。これを地獄と云う。死人をや

ひ むけん かえん

さいし けんぞく

しびと

ぜんご

争

く火は無間の火炎なり。妻子・眷属の死人の前後にあらそい

ごくそつ

あぼうらせつ

さいしとう

悲

泣

ごくそつ

ゆくは、獄卒・阿防羅刹なり。妻子等のかなしみなくは獄卒

声

にしやくごすん

つえ

てつじよう

うま

めず

うし

ごず

のこえなり。二尺五寸の杖は鉄杖なり。馬は馬頭、牛は牛頭

あな

むけんだいじよう

はちまんしせん

釜

はちまんしせん

じんろうもん

なり。穴は無間大城、八万四千のかまは八万四千の塵勞門、

いえ

切

出

しで

やま

こうし

かわ

辺

佇

家をきりいずるは死出の山、孝子の河のほとりにたたずむ

さんず あいが

べつ

もと

は三途の愛河なり。別に求むること、はかなし、はかなし。

ほけきよう

持

ひと

打返

この法華経をたもちたてまつる人は、これをうちかえし、

じごく

じゃつこうど

かえん

ほうしんによらい

ちか

しびと

ほうしんによらい

地獄は寂光土、火焰は報身如来の智火、死人は法身如来、

かきよう

だいじひいしつ

おうじんによらい

杖

みようほうじつそう

火坑は「大慈悲為室」の応身如来、またつえは妙法実相の

杖

さんず

あいが

しょうじそくねはん

たいかい

しで

やま

ぼんのうそく

つえ、三途の愛河は生死即涅槃の大海、死出の山は煩惱即

ぼだい

ちようざん

おんこころえ

たま

そくしんじようぶつ

かい

菩提の重山なり。かく御心得させ給え。即身成仏とも開

ぶつちけん

覚

開

もう

だいば

仏知見とも、これをさとり、これをひらくを申すなり。提婆

だつた

あびごく

じゃつこうごくらく

開

りゆうによ

そくしんじようぶつ

達多は阿鼻獄を寂光極楽とひらき、竜女が即身成仏もこ

ほか

そうら

ぎやくそくぜじゆん

ほけきよう

れより外は候わず。「逆即是順」の法華経なればなり。こ

みよう

いちじ

くどく

れ妙の一字の功德なり。

りゆうじゅぼさつ い

たと

だいやくし

よ

どく

へん

くすり

竜樹菩薩云わく「譬えば、大薬師の能く毒を変じて薬と

うんぬん

みようらくだいしい

がや はな

なすがごとし」云々。妙楽大師云わく「あに伽耶を離れて

べつ じようじやく もと じゃつこう ほか べつ

しやばあ

別して常寂を求めん。寂光の外、別して娑婆有るにあら

うんぬん

い

じつそう

かなら

しよほう

しよほう

かなら

じゆうによ

ず」云々。また云わく「実相は必ず諸法、諸法は必ず十如、

じゆうによ

かなら

じつかい

じつかい

かなら

しんど

うんぬん

ほけきよう

十如は必ず十界、十界は必ず身土なり」云々。法華經に

い

しよほうじつそうないしほんまつくきようとう

うんぬん

じゆりようほん

い

云わく「諸法実相乃至本末究竟等」云々。寿量品に云わく

われ

じつ

じようぶつ

このかた

むりようむへん

とううんぬん

「我は実に成仏してより已来、無量無辺なり」等云々。こ

きようもん

われ

もう

じつかい

じつかいほんぬ

ほとけ

の經文に「我」と申すは十界なり。十界本有の仏なれば、

じようど じゆう

ほうべんぼん

い

ほう

ほうい

じゆう

浄土に住するなり。方便品に云わく「この法は法位に住し

せけん そう じようじゅう

うんぬん せけん 習

さんぜ

て、世間の相は常住なり」云々。世間のならいとして三世

じようじゅう そう

歎

驚

常恒の相なれば、なげくべきにあらず、おどろくべきにあ

そう いちじ はっそう

はっそう しょうじ にじ 出

らず。相の一字は八相なり。八相も生死の二字をいでず。

覚

ほけきよう ぎようじゃ そくしんじようぶつ もう

かくさとるを法華經の行者の即身成仏と申すなり。

こしよりよう

きよう ぎようじゃ

そくしんじようぶつうたが

故聖靈はこの經の行者なれば即身成仏疑いなし。

歎 たも

ぼんぷ

さのみなげき給うべからず。また、なげき給うべきが凡夫の

理

しょうにん うえ

しゃかぶつ

ことわりなり。ただし、聖人の上にもこれあるなり。釈迦仏

ごにゆうめつ

しょうだいでしとう

覚

歎

ぼんぷ

振 舞

御入滅のとき、諸大弟子等のさとりのなげき、凡夫のふるま

しめ たも

いを示し給うか。

ついでんくよう

こころ

及

励

いかにも、いかにも、追善供養を心のおよぶほどはげみ

たも

ことく

言葉

しんじ

くしき

持

しゆぎよう

給うべし。古徳のことばにも、「心地を九識にもち、修行を

ろくしき

教

たも

理

そうろう

ば六識にせよ」とおしえ給う。ことわりにもや候らん。

ふみ

にちれん

ひぞう

ほうもん書

そうろう

ひ

たま

この文には日蓮が秘蔵の法門かきて候ぞ。秘しさせ給え、

ひ

たま

秘しさせ給え。あなかしこ、あなかしこ。

しちがつじゅういちにち

にちれん

かおう

七月十一日

日蓮

花押

うえのどののこけあまごぜんごへんじ

上野殿後家尼御前御返事